

審査の結果の要旨

氏名 楊 一帆

本論文は二部から構成されている。第一部は第一章から第四章まで近代初期、南京国民政府期間、中華人民共和国の成立初期の官庁建築と中国建築家の言論を研究対象に、折衷主義建築の変遷に重点を置いて検討する。第二部は建築家の主観的要素をメインに、建築観の形成要因及び中西折衷様式が繰り返し現れる要因を分析する。

第一章 中国の近代初期を貫く「中体西用」観と建築に対する認識

第一節 中国中心観と西洋楼建築では、円明園「西洋楼」の建設過程を論述することで、近代初期の中国社会に存在する「中国中心観」及び中国人の目に映る「西洋建築」を分析する。第二節 近代初期の「中体西用」観と官庁建築ではアヘン戦争後、洋務派は「中体西用」という物質、制度レベルの改革思想を提起し、完全に西洋の官庁建築を模倣した「親政建築」が現れたことを述べる。建築は「技術性」と「科学性」が意識されたが、文化的意義は意識されなかった。

第二章 中山陵

中国人建築家による最初の中西折衷様式建築である中山陵の近代建築史上における存在と意義を分析する。

第一節では「復興式」建築を概述し、第二節では中山陵コンペの発足プロセス、奉安募集、審査を分析する。第三節では呂彦直の方案を分析する。その他の建築家が「中国古典形式しかも特殊かつ記念性を含む形式」を如何に表現するのかに対する異なる理解、及び官庁建築様式の確立についてのべる。

第三章 「中国固有式」建築

南京の「首都計画」及び官庁建築家を研究対象に、国民政府の建設理念、及び「中国固有式」建築の設計思想を分析する。

第一節は南京建設と「首都計画」についての研究

第二節は南京の「中国固有形式」建築に関する分析であり、代表的な建築家を分析することで、南京官庁建築の形態及び建築家の異なる設計思想の形成と発展を説明する。すなわち範文照、楊廷宝、梁思成の思想である。

第三節は中央博物館コンペと上海における折衷主義建築を概観する。

第四章 20世紀50年代の「民族主義」建築

第一節では社会主義リアリズムと「民族形式」建築を分析する。

第二節は梁思成の「建筑可訳論」について分析する。「民族形式」＝「大屋根」建築という発展プロセスの中で、梁思成の理論は重要な役割を果たした。建国前後における氏の理論変化を比較すれば、氏は最終的に伝統建築の内在的合理性を追い求めることを諦めたことが分かる。「建築可訳論」で自身の古建築研究を折衷主義建築のパターン・ブックにしたことを明らかにした。

第五章 折衷主義建築の成立——「中国式」にこだわった中国人建築家

中国人建築家の地位、近代主義の流行、建築観の形成から折衷主義建築が繰り返し流行することの要因を分析する。なぜ近代中国人建築家は建築における「中国風」問題にこだわったのか、なぜ建築の「中国風」問題にいつも中西折衷洋式を用いて回答したのかを解明する。

第一節では20、30年代の「中国固有式」と50年代の「民族主義」の背景を比較し、文化民族主義の影響を分析する。

第二節では西洋化と近代化の諸相を整理する。

1 近代精神が伴わない近代建築

2 中国人建築家の確立

このふたつの要素が認められる。

第三節では折衷主義建築の形成を解明する。

30年代、彼らが見つけたのは外国人建築家の「復興式」建築であり、50年代には30年代の建築を模倣した。西洋の「ポストモダンリズム」理論が中国に渡来した後、建築家たちは自らが設計する80年代の折衷主義建築に理論根拠を見つけた。こうして建築様式を選択するやり方によって、様式主義が現れたと結論付ける。

以上は興味深い比較文化史的建築研究であり、博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。